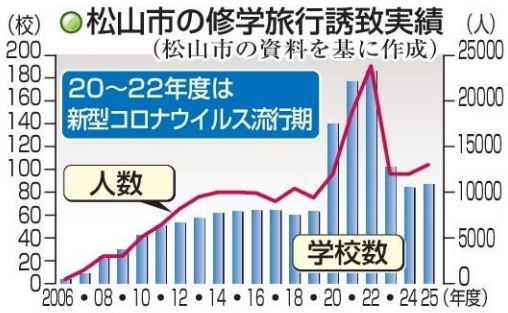
自然や文化体験が好評／混雑地避ける傾向

修学旅行先 愛媛が増加

中高生の修学旅行先として愛媛を選ぶ学校が増えている。地方の自然や文化を学べるコンテンツが人気のほか、昨今の物価高、オーバーツーリズム（観光公害）を受け、定番観光地を避ける傾向も影響しているようだ。各自治体は誘致の好機とみて受け入れ環境整備を進める構えだ。



12月中旬、東京都から工学院大付属高校の生徒約30人が3泊4日の日程で広島、愛媛両県を訪れた。広島市内で平和学習をした後、3日目に今治市に入り、瀬戸内しまなみ海道でサイクリングを体験。最終日は松山市に移り、道後エリアを散策した。

同校が修学旅行先に愛媛を選んだのは今回が初めて。物価高騰が続く中、旅行費用を予算内に収めつつ、多様な体験ができ地域活性化の現場を学べる点が決め手になったという。男子生徒(16)は「サイクリングは景色も最高で、都会にはない気持ち良さだった。食事もおいしかった」と満足な様子。「もう一度来てゆっくり楽しみたい」

松山市の修学旅行の誘致事業は2005年度にスタートした。定番の道後温泉本館や松山城の見学だけでなく、離島・中島でのミカン収穫、隣の砥部町で砥部焼の絵付けなども体験できるとアピールしている。

25年度の受け入れは87校約1万3千人に上る見込みだ。近隣地域からの訪問校が急増した新型コロナウイルスの流行期（20～22年度）を除き、人数は過去最高になったという。

地域別では、関東30校▽関西21校▽中部・東海14校―など。市観光・国際交流課によると、毎年3割ほどが新規の学校とし「誘致効果が一定出てきている」と手応えを語る。

南予の自治体も体験民泊を軸とした修学旅行の誘致に力を入れる。八幡浜市ふるさと観光公社によると、農林水産体験が好評で、25年度の受け入れは9校163人。問い合わせも年々増えているという。

関東エリアの修学旅行を企画する日本旅行（東京）の担当者は、インバウンド（訪日客）の増加で混雑地を避ける傾向が出てきたと説明。「京都や沖縄などではない地域を希望する学校が増えている」と話す。

旅行内容も1次産業の持続可能性や人口減少など地域課題を学ぶ体験学習にシフトしている点を挙げ「瀬戸内海の多島美や道後温泉などは学校の評価も高い」（同社）。日中関係の冷え込みが長引けば主要観光地の混雑が緩和されるとの見方もあるが、愛媛の修学旅行先需要は手堅いとみる。

八幡浜市ふるさと観光公社の担当者は「修学旅行は将来の旅人口をつくり、地域活性化につながる」と意義を強調。需要増に対応した受け入れ体制の整備が課題とし、各市町と連携しながら誘致活動を続けたいとした。（井上華菜子）

各自治体誘致 受け入れ環境整備に力

道後温泉本館の前で記念写真を撮る工学院大学付属高校の生徒＝2025年12月中旬、松山市道後湯之町

愛媛新聞 :朝刊 2026/01/03 面名:二社 ページ:004

(C) 愛媛新聞社　無断転載、複製及び頒布は禁止します。